

「まちづくり」からの防災計画

柴田いづみ

滋賀県立大学 名誉教授

結いのまちづくり研究所 代表

1923年（大正12年）8月31日、主人の母みち子が皇居近くの气象台の官舎（みち子の祖父、岡田武松の自宅）で生まれた。翌朝、9月1日関東大震災。難を逃れたものの、これが柴田家の防災の始まりとなった。

息子夫婦である我々が結婚して目白に新居という段になっての注文は「防火壁ならば、家を作っても良いから。」でした。理由は、近くの家々も代が代わる毎に区画が小さくなって、火元が増えているからであった。そこで我々は防火壁に住むこととなった。当時の母屋は、戦後、文京区から引っ越してきて、1947年（昭和22年）の臨時建築制限規則により15坪として建てられた家を増改築した木造であった。その東側の空き地に防火壁としての我が家は、コンクリートで建てた。それは、義理の母の「大震災の時も東京大空襲の時も、蔵などの建物の影に回って助かった人がいたと聞いている。」という事と、「歳を取った時に避難所には逃げられないかもしれないので、自分の家において安全であって欲しい。」という理由であった。結果的に、木造の母屋の東側は我が家の防火壁、2期工事として、母屋をコンクリートとし北側を防ぎ、3期工事として西側を防ぐ事になった。南は、太陽を得る大事な面なので木々を植えて、緑の防災カーテンを作った。17年かかった。コンクリート面は壁面緑化し、南面の歩道状空地における緑道の考え方は、道路の反対側にマンションが建つ時にもお願いし、建物の前面に街路樹が植えられて緑のトンネルが実現した。緑化計画は、防災だけでなく、「まちづくり」の大事な要素で、「緑化計画一石七鳥」としてまとめた。つまり、1, 防災、2, CO2削減+ヒートアイランド防止、3, 景観、4, ビオトープ（生物の生息域）、5, 資産価値、6, 集客録・観光、7, 感性豊かな子供が育つことである。

防災においては、建物の耐震化を勧め安心して住めることに加え、緑化で個人の建物だけでなく「まちづくり」の視点からの安全にも貢献し、平常時と非常時の双方について自分の命と地域を守る必要がある。

-----

プロフィール

柴田 いづみ (しばた いづみ)

滋賀県立大学 名誉教授

結いのまちづくり研究所 代表

早稲田大学卒業。同大学院修了。仏政府給費留学生として渡仏。仏国立建築学 校 (旧ボザール) 卒業。仏政府公認建築家。一級建築士。柴田いづみ建築設計主宰。2013年3月まで滋賀県立大学教授、4月より名誉教授。S KM設計計画事務所。結いのまちづくり研究所、柴田いづみまちなか研究室。JR 矢吹駅と JR 行橋駅、両駅周辺計画他